

大衆文学大系

横溝 正史

海野 十三

小栗虫太郎

木々高太郎

監修 大佛次郎 川口松太郎 木村毅

大衆文学大系

25

横溝 正史
海野 十三
小栗 虫太郎
木々 高太郎



大衆文学大系25 横溝正史 小栗虫太郎 集
海野十三 木々高太郎

昭和四十八年五月二十一日 第一刷

著者 横溝正史 海野十三 小栗虫太郎 木々高太郎

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二十一 郵便番号一一二
電話東京〇三九四五一一二二(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 三四〇〇円

◎横溝正史 佐野晴彦 小栗とみ 林峻一郎
落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

目次

横溝正史集

真珠郎

七

面影双紙

九

鬼火

一〇

蔵の中

一三

かいやぐら物語

一六

孔雀屏風

一七

海野十三集

蠅 男

一七

俘 囚

二五

振 動 魔

三〇

三人の双生児

三〇

小栗虫太郎集

黒死館殺人事件

三七

木々高太郎集

人生の阿呆

叁

網膜脈視症

壹

睡り人形

壹

文学少女

貳

折蘆

壹

年 解 解
譜 題 說

八二 八九 〇〇

橫溝正史集

真珠郎

序詞

真珠郎はどこにいる。

あの素晴らしい美貌の尊厳を身にまとい、如法闇夜よりもまっくらな謎の翼にうちまたがり、突如として世間の視聴のまえに躍りだしたかと思うと最初は人里離れた片山蔭に、そしてその次には帝都のまっただ中に、世にも恐ろしい血の戦慄を描き出した奇怪な殺人美少年。いったい、あいつは、どこへ消えてしまったのだろう。

美貌というものは時によると、もっとも人眼につき易い看板みたいなものである。殊に真珠郎の場合はそうであった。彼の特徴のある美貌はあらゆる新聞に掲げられ、あらゆる人々の口

から口へと喧伝された。そういう眼に見えぬ網の目を潜って完全に世間から隠れおせるということは、それ自身がひとつの奇蹟みたいなものだった。しかも真珠郎は見事にその奇蹟を演じおせたのだ。

蠶のように白い両手を、一人ならず二人三人まで、殺人の血で真紅に染めながら、あれよあれよと立騒ぐ世間を尻眼に彼はまるで空気のように消えてしまった。大海に垂らした一滴の水のように、完全に世間の視聴の外へ姿を隠してしまったのである。まったく、魔法使いも及ばぬほどの巧妙さだった。

なんとという不思議な男だろう。なんとという恐ろしい男だろう。世間が瞠目したきり、言う言葉も知らなかったのは、まことに無理からぬ話だった。

しかし、だいたい真珠郎という、少からずロマンチックな名前を持ったこの男は、その出生からして既に、世にも怪奇な、伝奇的色彩につつまれていたのである。

第一彼には、真珠郎という呼名があるだけで姓もなければ、むろん籍などどこにもない。つまり彼は最初からこの世に、まるで存在しなかった人も同じなのだ。

まったく、突如として黒い颯風が捲き起るように、血の衝動に狂いたった彼が、あの恐ろしい最初の惨劇を演じるまでは、世間にはそういう人間の存在していることを知る人すら極くまれだったのである。

真珠郎だつて？

いったい、そんな人間がほんとうに生きているのか。それは夏の夜の幻想ではなかったのか。あの大自然の非常時に畏怖した人々が、その瞬間われにもなく空中に描き出した、ひとつの麗気稜的な存在ではなかったのか。

世間にはそういう疑問を抱いている人々も少なくないようだ。

しかし、私はそれらのひとに向つて、断乎として「否！」と答えることが出来る。なるほど最初の惨劇の当時の、あの怖ろしい周囲の光景は、われわれにとつては、狂おしいほどの大きな衝動だった。私は敢てそれを否定しようとは思わない。しかしその時私たちは、理性をすっかり失いきつていたわけではないのだ。われわれにはまだ多分に物を判断する力が残っていた。

だから私はここに、ハッキリと断言することが出来るのである。真珠郎はたしかに生きていた。われわれが恐怖のあまり虚空に描きだした幻でもなければ夢でもない。彼はたしかにわれわれと同じように、空気を呼吸し、水を飲み、食物を摂取して生きていた、現実的な存在だったのである。

もし諸君が求められるならば、私はいくらでも、彼の生存を立証する証拠の品々をお眼にかけることが出来る。だが、ここであまりお先走りをすることは控えよう。

唯一言、私をはじめてこの不思議な男を垣間見たときの、あの骨の髄まで冷くなるような、恐ろしい印象をお話しておいて、それから、この物語の本題に入ることにしよう。

私は今でも、あの時の光景をハッキリと眼のまえに思いうかべることが出来る。それは古色蒼然たる浮世絵というか、それとも霧に包まれた宝石というか——ひそやかに燃えあがる光沢と、手摺れした美しさをうちに包んだ、妙に人の心をしびらせるような、一種名状しがたい、頹廢的な印象だった。

それはある山国の湖畔における、森沈たる真夜中のことなのだ。私はゆくりなくもその柳の樹のしたに、眼もあやに飛び交う無数の螢火につつまれて、蹠踉として立った真珠郎のすがたを垣間見たのである。

その時彼は、たつたいま、湖水の底から這い出して来たもののように、全身ビッシヨリと水に濡れていた。そして、柳の樹

に斜に支えた体は、まるで癱を病む者のようにはげしく頼えていた。

それにしても私は、あんなに恐ろしい螢の群を見たことがない。ちょうど夏の夕方など、よく軒端に見かける蚊柱のように、纏れあい、絡みあいながら、無数の火の柱となつて、この不思議な男の周囲を飛び交っているのだ。どうかすると、これらの柱から引きはなされた一団の螢が、鬼火のように青白く燃えながら水のうえに落ちたかとおもうと、そこからまた無数の光の破片となつて、パッと四方に飛散することもあった。

真珠郎はこういう螢火のまんなかに立っていた。その顔色はまっさおだった。それは必ずしも螢火のせいばかりではなかったらしい。彼が頼えるたびに、水に濡れた草色の洋服が給のうらにひらひらと輝いた。そしてポタポタと全身から落ちる水滴は、鮫人の涙のように、そのまま凝つて、美しい珠となるのではないかと思われたくらいである。

真珠郎はやがて、つと手を伸ばすと、眼のまえをとぶ螢をつかんだ。そしてそれを口の中に放りこんだ、するとどうだろう、彼の頬は透きとおる螢の火にちやうど鬼灯の実のように美しく輝いたのである。

第一章 ヨカナーンの首

X大学の英文科に講師として席をおいている私、椎名耕助は、今まで自分を運命論者だなど思ったことはない。寧ろその反対に、学校における私の評判は、大変散文的で、且つ實際的な人物であるということになっているらしい。

私自身もそういう評価に対して、別に不服はないし、いやむしろ、それを誇りとしていくくらいの人間なのだ。

しかし、あの年の七月のはじめごろ、九段の高台から、遙か西の空に望見した夕焼雲の形だけは、ひどく暗示的であったと、今でも私は、思ひ出す度に妙な気がしてならないのである。

その時私は、いつものように牛込見附から僧行社の横へ抜け、靖国神社のまえを斜に突切って、一口坂のほうへ出ようとしていた。この道順はその日まで三年あまり、殆んど毎日のように私の通い馴れた道なのである。大村益次郎の銅像を横眼に睨みながら、ゆるやかな九段の坂を登る。大鳥居のまえを横ぎって、斜に電車通りのほうへ出る。

これが判で捺したような毎日の私の道順なのだが、ここで私には、いつの間にか、つぎのような習慣が出来ていたのである。大鳥居のまえを横ぎってしまふまえに、私は必ず一度、歩調をおとして帽子をとるのだ。こんな習慣がいつ頃から出来たのか、自分でもよく記憶していない。しかしよく気をつけているとお天氣が悪くて、両方の手が塞がっているとき以外には、必ずあの大鳥居のまえで帽子を脱ぐようだ。最初は敬神の念から出発したのかも知れないが、今では殆んど無意識化された動作となつてゐる。あるいは、あの坂を登るときに心臓の働きを、ここで調節しようとして、ちょっと一服するのもかも知れない。

それは兎も角、その日も私はそこまで来ると、いつものように歩調をゆるめて帽子をとった。そして何しろ暑い日であったから、その帽子で軽く胸をはたくようにしながら、ふと私は、招魂社の雑木越しに、その雲を見たのである。

梅雨の名残りが、どこかまだその辺にさ迷つていそうな、妙に蒸暑い夕方だった。西の空いっさい、目の細かい銀粉を撒き散らしたように、どんよりと煙つていて、その中に唯ひとつ、

その奇妙な雲だけが、むくむくと黒い雑木林のうえに頭をもたげていたのである。

その時私は、まったくどうかしていたのに違いない。二三日頼まれて夜学の試験に立会つたり、その答案を徹夜で見させられたりしたので、神経が疲労していたのかも知れない。兎に角私は、その雲を見ると思わずぎょっとしてそこに足をとめたのである。

それはちょうど、人間の首とそっくり同じ恰好をしていた。横向きになつた鼻の高い、額のひろい、そして長く伸した髪の毛を、首のあたりで縮らせた、そういう恰好の雲が、黒い雑木林のうえに、西日をうけて真紅に、それこそ血が垂れそうなほど真紅に燃えているのである。しかもその首の切れ目にあたるところに、横に一文字に、別の雲が棚引しているのが、ちょうど一枚の益か皿のように見えるのだ。つまりその雲は、盆の上のせて、サロメの前に差出された、ヨカナーンの首と、そっくり同じ恰好をしているのだ。

「あっ！」

私は思わず息をとめてそこに立竦んでしまった。嘔つてはいけない。その時の私の、妙に鬱血したような、物憂い精神状態に對しては、この雲の形が、なんともいえぬほど不吉なものに感じられた。全く胸が塞がれるような、空虚な感じだったのを、今でもハッキリと私は記憶している。

「やあ。」

と、その時あの男がうしろから、肩を叩いてくれなかったら、私はいつ迄もそこに立竦んでいたかも知れないのだ。

「どうかしたのですか。何を見ているんです。」

そう言いながら前に廻つて、私の顔を覗き込んだのが乙骨三四郎だったから、私がそもそもこの恐ろしい事件に首を突込む

よくなったのは、実にその時、宙に浮いていたヨカナンの首のせいだったと言っても、必ずしも間違いではないのである。「あ、いや。」

私はいささか極りが悪かった。どきまぎとしながら、あわて、

「あの雲を見ていたのです。ほら雑木林のうえに見えるでしょう。ちょうど人間の首のような恰好をしているじゃありませんか。ヨカナンの首ですね、あれは……。」

乙骨三四郎は驚いたような顔をして、私の指さす方を見たがすぐと首を振りながら、

「私にはそれは見えませんね。むしろ駱駝らくだみたいじゃありませんか。」

「ははははは、そうかも知れません。私はよっぽどどうかしているのですね。今ね、あの雲を見て、ポタポタと血の垂れる人間の生首を連想していたのです、ああ厭だ。時にどちらへ？」

「疲れてるんですね。そういえば少し顔色が悪いですよ。あまり勉強が過ぎるんじゃないやありませんか。たまには休養をしなければいけません。わたしですか、わたしはちょっとこの先の知人のところまで。」

私たちはそこで当然、肩を並べて歩き出すことになった。

いったい、この男とこんなに馴々しく口を利くのはその時がはじめてだった。乙骨三四郎もやはり私と同じ私立大学に講座を持っているのだが、専門が違うから、学校で会っても殆んど口を利くことはない。彼は東洋哲学を講義しているのである。

私は彼が、さっきのことを変に思っでやしないかと気になったので、いくらか弁解するような気持でいった。

「私はね、子供の時から雲を見るのが好きなんです。殊に夏の雲はいいですね。尤も東京にいては、あまり変わった雲の形も

見られませんがね。私の郷里——中国の山の中では、実にいろんな雲を見ることが出来ますよ。だから私は毎年いまごろになると、どこか山の中へ逃げだしたくなります。郷愁とでもいうのですか。矢も楯もなく、旅行をして見たくなることはありません。」

「お国は中国ですか。」

「そうですね、岡山のずつと奥、むしろ山陰に近いほうです。」

「私は東北ですがね。あなたは日本海を見たことがありますか。」

「いや、知りませんね。海という奴をあまり知らないのです。太平洋なら、汽車の中からちょっと覗いてみたことがあります。」

「東海道線ですか。あの汽車の中から見る海なんてものは、箱庭みたいなものですね。実に穏かで、暖かそうな気がするでしょう。それに較べると私の郷里の海など、何かしら鋭い圭角けいかくの多い人格を感じさせるような気がしますね。人に捨てられ、うらぶれて苛々げげしている、そういう感じですよ。人間などもその通りなんです。なにしろね、土地が痩せて、光線が乏しいでしょう、他人を押し倒しても、自分の土地を糞くそらせる工夫をしなければ生きていけません、私なども。」

と、乙骨三四郎は夕陽に向って手を振るような身振りをしながら、

「よく人から、利己主義者だといわれます。だが仕方がないのです。あの暗い郷里の海と山のことを考えると、せめて自分だけは一等人種にならなければという気がします。人のことなんか構っていられるもんか。他人を押し倒しても、自分だけは出世しなければならぬという感じに打たれますね。」

私は驚いて彼の顔を見直した。どうして彼が、あまり悪意で

もない私に向つて、こんなことを饒舌る気になったのか、私にもよく分らない。全く彼の饒舌には、どこか憑かれた人間のようになり、一種異様なところがあつた。

「嘘っちゃいけませんよ。あなたは私の学生生活がどんなに惨めなものだったか、御存じないからそんな妙な顔をなさるんです。じっさい、私のように窮乏した生活を送つて来た人間には、世の中のあらゆる金が金というメドで計算されます。金のない青春、それがどんなに惨しいものか君は知っていますか。じっさい、私には青春なんかなかったというよりほかはない。しかし見てごらん下さい。私はいまに絢爛たる生活を自分の周囲につくつてみせる。私のこの才智と肉体とで——」

乙骨三四郎はそこで立止ると、ふとあたりを見廻した。

「おや、お饒舌をし過ぎて、思わず来過ぎちゃいました。じゃ失敬。私の話にとらわれちゃいけませんよ。」

そういすてると彼は、さっさと大股に電車道を横ぎつて向うの横町へ消えてしまった。私はちよつと煙に巻かれたような形だつた。全く妙な男だと思つた。

もしその時誰かが私の肩を叩いて、遠からず君はあの男と世にも恐ろしい冒険の敵々をともにするだらうなどといおうものなら、私はきつと真赤になつて憤慨したに違いない。

ところが事実はどうなのである。それから十日ほど経つて私はまた乙骨三四郎と語り合ふ機会があつた。その前に、私の別の友人が、彼について話してくれた批評の言葉をここに書止めておこう。

「あの男はね、あまり物質的に困窮したものだから、人間がすつかり critical になつてしまつたのだよ。素晴らしく頭腦のいい男だ。自分でもそれを意識しているんだ。だから自分のような秀才がこんなに困つてゐるのに、何んのとりえもないぐ

うたらな連中が贅沢な生活をしているのは不合理だというのだ。あいつの物の観方というのは万事それなんだ。仮借するということを知らぬ性質らしい。誰かがあいつを目して警吏になつたらよからうと批評したが、蓋し適言だね。尤もそうなる

と、随分酷薄な警吏が出来あがるだらう。はははははははは。」

ところで、私が二度目に彼と話し合つたのは、ある講演会の帰途だつた。私はそこで「トマス・ハーディの人と芸術について」という演題のもとに、一席の講演をしたのだが、はからずも同じ会で、乙骨三四郎も印度哲学かなにかに就いて話したのである。

その帰途、私は誘われるままに喫茶店へ寄つて、一杯のコーヒーを飲んだ。

「どうです。その後、ヨカナンの首は現れませんか。」

乙骨がからかうように言つた。

「有難う。お蔭でね。この頃は専らサロメの乳房のほうに悩まされていますよ。はははははは。」

「結構です。そういえば顔色がよくなりましたね。あの時は実に悪かつた。なんだかこう土色をしていた。時に旅行をしませんか。」

「大いにしたいのです。しかし、どうも経済状態が許さないのですね。」

「大丈夫ですよ。君たちは物の考えかたが贅沢だから、億劫になるのですよ。僕などに計画させたらいくらもかからないのです。ほんとうに旅行する気がありますか。」

「それはもう。」

「実は僕もこの休暇中にとめておきたい研究があるので、どこか涼しい山の中へ逃げようかと思つてゐるのですが、信州はどうです。行つてみる気はありませんか。」

「信州はどの辺ですか。」

「浅間の近所ですがね。五六年まえに一度行ったことがあるのですが、あの辺は安いですよ。うまくやれば東京で暮すより安くあがるかも知れない。もし君にその気があるなら、プランを樹ててあげてもいい。」

その時私は別に、ハッキリとした返事をあたえたつもりはなかったのだが、驚いたことにはそのつぎの日、学校で会うと、彼はいきなり一枚の明細書を私のまえに突きつけたのである。それはいかなりも彼の性格を物語るような、実に微に入り細をうがった明細書だった。それでいてどこにも無理を感じさせないような、非常に頭脳（かま）のいい旅行案内なのだ。

「なるほど、これくらいでいければ、東京にいるより安くあがるかも知れませんね。」

「いけますとも、但し贅沢をいっちゃん限りがありませんよ。君は酒を飲まないのでしょうか。」

「酒も煙草も。」

「なら、大丈夫ですよ。折角こうしてプランを樹てたのだから、是非一緒に行こうじゃありませんか。」

私はこの男が非常にねつこい性質で、同時に暴君的な性格の持主であると聴いていたが、なるほどと思った。この旅行計画に関する彼の態度は、勧誘というよりも、寧ろ命令的なのだ。よくいえば明快なのだが、悪く言えば高飛車で気の弱い私などには断りようのない程、圧倒的なものである。

しかし、結局私はこういう強い意志と性格を持っている男と、一緒に旅行をするのは決して悪い経験ではないと思った。そこで快く万事を彼に一任することにしたのである。

そしてそれから一週間ほど後、忘れもしない七月十五日の夜、東京のお盆をあとにして上野を発った私たちは、この旅の

最初の目的地である信越線の某地に向ったのであった。

第二章 虹 と 女

この旅行の最初の部分については、私はあまり多く語ることを持たない。

乙骨三四郎はいくとも言った通り、飽迄も暴君的で、私の意見がとりあげられるようなことは滅多になかったが、その代り、彼のプランは実に綿密なもので、それに盲従していると、だいたいに於て満足な結果が得られるのだった。尤もいくら flexibility に欠けていて、窮屈な感じがしなくてもなかつたが、これはわれわれの懐中勘定（かぶち）からいって止むを得ないことだったのだから。

私たちは最初の十日ほどを附近の温泉場で過した。それからそこに飽きるとKに移った。私たちが最初にN湖畔の話を書いたのはこのKの宿に於てであった。

「どうしてNへいらっしやらないのですか。あなた方のような方がNへいらっしやらないのは間違っていますよ。勉強をなさろうというのなら尚更のことです。静かですか？ そうです。まあ浅間でも爆発しない限りは、申分なく静かだといえるでしょうね。」

そういつて、この間までNにいたというこの男は、その湖畔の美しいことや浅間の眺めの変化に富んでいることや、つまり客引きとしては申分ないほどの誇張と詠歎（えいさん）とをもつて散々私たちの心を動かしたのだった。

「宿はありますか。」

「ええ、むろん。だけどあなたの方のような人は、ふつうの家を都合つけてお貰いになったほうがいいでしょうね。」

「そんな家がありますか。」

「探せばないこともないでしょう。」

ところがここに一寸妙な事が起った。これだけのことなら私たちの心がいくらか動いたというに止まるのだが、それから三日ほど後に、とつぜん見知らぬ男が私たちの面前に現れた。その男はNからこの土地へ日用品の買い出しに、一週間に一度くらい出て来る一種の便利屋のような者だったが、かねてN湖畔に家を持っているさる人物から頼まれて、適当な人間があったら夏中、その一室を提供してもいいというのでそういう客を物色していたところだという話なのだ。

「湖水のすぐ側になつてゐる家でしてね、おそらくあの辺でも一番見晴らしのいい場所でしょうね。ええもう、静かなことにかけては十分保証します。近所にかつてもものはありませんし、それに広い邸の中に主人と姪御さんの二人きりなんですからね。」

「いったい、何をされるんですか。」

「鵜藤さんと言って、御主人はたしか医者だということをお聞きしました。でも、開業しているんじゃないやありませんよ。もとは東京の大学かどこかにいられたんですが、二十年も前からその湖畔に引退んで、本ばかり読んで暮しているというようなんです。」

「家族はその人と姪と二人きりなんですわね。」

「ええ、たいへん綺麗な娘さんで、三四年まえに東京の女学校を出て、こちらへ来られたんですが、その姪御さんが淋しがってね。それでせめて夏中でも人を置いたらということになつたらしいんですよ。何しろ女中さんも使わずにやつていられるんですから。」

私の心は少からず動いた。私はなにもN湖に対して特別に執着があつたわけではないが、この思いつきによつて、乙骨三四郎のスケジュールに狂いがくるということが愉快だつたのだ。まつたく私は、彼のあまり綿密すぎる計画に、少からず窮屈さをかんに感じていた際だから、少しの犠牲ですむことなら、ちよつと足を出してみたくて耐らなかつたのだ。

乙骨三四郎はそういう私の気持を察したのであろう。白い歯をだして微笑しながら、

「いいでしょう。大して予算の狂ふことじゃないのだから。」

と案外あっさりと同意の旨を述べた。

私によつて表明された意見が、異存なく彼の容るるところとなつたのは、おそらくその時がはじめてだろう。私は有頂天になつた。そこでNから来ているこの風変りな客引きと、尚十分な打合せをしておいて、いよいよその翌日の午後、Kを發つてNに向う手筈を定めた。NからKまでに一日に一回乗合自動車かT峠を越えて往復しているのだ。

その翌日は雨だつた。春雨のような細かい雨が咄しげに音を立てて降つていた。これには些か出身を挫かれた形だったが、今更、約束を反古にするわけにもいかない。私たちは勇を鼓して乗合自動車に身を託することとなつたが、ほかに相客といつてはひとりもなかつた。乗合が規定の時間より少し遅れてKを出發したのは三時半を過ぎていた。

はじめのうち私達は、この突然の思いつきについて、いくらか後悔の色がないでもなかつたが、しかし、ものの三十分もいかないうちに、私はやつぱり出て来てよかつたのであつたのである。私たちの左右には、間もなく、なんともいえないほど美しい景色が展開されはじめたのだ。

T峠にさしかかつたころより、雨はしだいに小降りになつて

来た。薄墨いろの雲の切れ目から、しだいに肌を現してくる浅間の山は、ちょうど剃り立ての女の眉のように青く煙っていた。この辺はもう秋の季節と見えて路の両側には可憐な秋草が一面に咲き乱れている。自動車の窓ガラスを打つ雨はしだいに間遠になっていった。そしてT峠を向うへ越すころには全く歇んでしまつて、だんだん多くなつて行く雲の切れ目から、磨きすましたような深い群青色の空が見えはじめ、間もなく数条の金色の矢が、浅間をさつと斜にかすめて落ちて来るのが見えた。

この自動車の途中で、これから私がお話しようとするこの恐ろしい物語に、大変ふかい関係のある人物に出会つたから、そのことについてちょっとここに書留めておこう。

T峠を越えて間もなくのことである。私たちの自動車へ乗込んで来たひとりの女があつた。この女を、なんといつて形容していいのか、私にはよく分らないのである。服装からいうとこの女は乞食にも劣つていた。着物ももんべもぼろぼろに破れて、到るところに氷柱のような襷褌が下つていた。油気のない頭は赤茶けて、小鳥の巢のようにもじゃもじゃとしているのだが、それがぐっしりと雨に濡れて、髪の毛の一本一本から、ポタポタと滴が垂れている。陽に焦けた膚は淡紙色をしていて、眼がおそろしく鋭かつた。年齢はいつたどのくらいだつたらうか。私は元来女の年齢を当てるのが不得手だったが、この女はいつそう分らない。ひどく年寄りのようでもあるし、また案外そうでもなさそうに見えるのである。

最初この女が狭い路の真中に立ちはだかつて、両手をあげて自動車の行手を遮つたとき、運転手と車掌の顔には、少からず当惑の表情が現れた。運転手はチェックと舌打をしながら、でも仕方なしに車をとめると、しばらく大声で応対していたが、女の態度にはその外貌に似合わず、一種犯しがたいような威厳があつた。しばらく彼女が鳥のような鋭いキイキイ声で、私たちには分りかねることを喚きちらしていたが、そのうちに運転手は言いまけたものか、苦笑いをしながら扉をひらいたのである。

女は全身からポタポタと滴を垂らしながら、自動車で乗込んで来たが、さすがに遠慮したものか、座席に腰を下そうとはせずに、鉄の支柱につかまつたまま、ガラス戸越しに外を眺めていたが、そのうちにくるりと私たちの方を振りかえると、

「あなたがたはこれからどこへ行きなされる。」

と、例の鳥のようなキイキイ声を張りあげて訊ねるのである。

「Nへ行くんだよ、婆さん。」

と、私は答えた。黙っているようにと車掌が眼配せをしてくれたのだけれど間に合わなかつたのである。

「わたしは婆さんじゃない。わたしはまだ若いのだ。」と、例によつて鋭いキイキイ声で「だがお前さんがた、Nへ行くのは止したがいい。悪いことは言わないここから引返したほうがよろう。」

「どうしてだね、婆——なぜわれわれがNへ行つちやいけないのだね。」

「何故でもないけない。その理由はいえない。だがお前さんがた、Nへ行つて碌なことはありやしないよ。」

「折角だが、婆——いや、小母さん、私たちはちゃんと宿を約束してあるのだ。理由もないのに引返すわけにはいかないんだよ。」

婆さんは鋭い眼でじつと私の顔を見ながら、

「お前さんは何も知らないんだ。そしてそこにいるお前さんの連れも、——お前さんたちのまえに、今にどんな恐ろしいこと